３．「丹後国加佐郡由良村加藤長助家文書」（個人蔵・京都府立丹後郷土資料館寄託）の調査

藤本仁文

丹後国加佐郡由良村（現在宮津市）は、江戸時代後期から明治時代にかけて船頭や水主など多くの船乗りを輩出した村である。加藤家もその一つであり、その文書群は明治時代を中心とした文書で構成され、4571 点からなる（枝番文書を除く）。この時代に船頭として活躍した加藤長助の航海記録や、積み荷、船主とのやりとりの書状や、大福帳などが多く残る。具体的には、品物の細かなやりとりを記した大福帳や差引帳がまとまって残っているほか、荷物の受取・引渡、買物覚、様々な荷主とのやりとりの書簡が残っている。

加藤家文書は、上記のような特徴を持ち、幕末から明治時代の海運業の実態を知るうえで、非常に貴重な史料であり、これまでも部分的には使用されて広く知られてはいた。しかし、あまりに膨大な文書群であるため、近年ようやく全点の整理がなされ目録が作成され、本格的な使用が可能となった。文書群全体の把握ができ、各段に閲覧しやすくなったため、本文書群の価値に多くの研究者が気づき、活用例が増えていくものと考えられる。今後、活用例が増えていく中で、多くの重要な事実が明らかにされていくものと考えられる。

昨年度末から今年度にかけては、ひとまず最も文書の残りが良い明治 34 ～ 36 年（1901 ～ 1903）の 3 年間に作成された文書の調査を行った。明治 34 年については、同年 1 月 1 日付下津井湯浅孝松から加藤長助に宛てて出された正月の相場などを報告する書状（文書番号 1524）で始まる。最後は同年 12 月 31 日付の送金証（文書番号 2281―2）であり、同 34 年は全 243 点である。同 35 年については、同年 1 月 1 日付下津井湯浅孝松から加藤長助に宛てて出された新年の挨拶や肥料の商況を伝える書状（文書番号 2281）で始まる。最後は同年 12 月 29 日付境港渡邊多七郎から加藤長助に宛てて出された商況報告の書状（文書番号 2245）であり、全 240 点である。同 36 年については、同年 1 月 2 日付尾道有元義兵衛から加藤長助に宛てて出された相場下落の書状（文書番号 2129）で始まり、最後は同年 11 月 19 日付で朝鮮釜山港の森本仙蔵から加藤長助に宛てて出された商況報告の手紙（文書番号 2119）であり、全 192 点である。この 3 年間に作成された文書が上記の通りであり、合計 675 点についての文書を確認し、複写撮影を行った。

試みに、上記で名前の挙がった 3 名に関する文書をこの 3 年間で探すと、下津井湯浅孝松関係が 74 点、境港渡邊多七郎関係が 7 点、尾道有元義兵衛関係が 12 点であった。「小林善治郎家文書」（舞鶴市郷土資料館所蔵）でもよく見かける名前であった加茂花澤由蔵関係の文書はこの 3 年間で 74 点、江差武田庄兵衛が 15 点、加藤家文書の中にも見られた。以上のことから、加藤長助・森本仙蔵らは、少なくともこの明治 34 ～ 36 年の 3 年間に関しては、下津井湯浅孝や加茂花澤由蔵らと特に密接な関わりを持ちながら海運業を営み、彼らの商店が各地の拠点のような役割を果たしていたといえる。さらに江差武田庄兵衛、境港渡邊多七郎、尾

道有元義兵衛ら、全国各地の港の商人とも関わりを持ちながら海運業を営んでいたことも分かる。

また興味深いのが、例えば明治 34 年 5 月 13 日付で新潟小澤商店方森本仙蔵から加茂花澤商店方加藤長助に宛てて出された書状（文書番号 1861）は、江差武田庄兵衛方へ転送されていることである。新潟の小澤商店に滞在か出入りしていた森本仙蔵が、加藤長助が当時加茂花澤由蔵の所に滞在か出入りしていることを把握していたため書状を郵送しており、長助・仙蔵が密接に情報交換しながら全国各地の港を廻っていたことが分かる。また同時に、書状が届いた時にはすでに長助は次の江差武田庄兵衛の所へ向かっていたため、花澤由蔵は江差にこの書状を転送したものと考えられる。

加藤家文書の膨大な史料はこのような動きまですべて分かる史料であり、加藤家が築いていた全国各地とのネットワーク、またその背後にある全国各地の商人が築いていたネットワークが分かる可能性がある、大変貴重で興味深い文書群であると言える。多くの研究者に広く活用されることを期待しつつ、今後も調査や研究成果の公開に携わっていきたい。